

# 求められている と「矜持」

政界展望



「ガバナンス」と「矜持」がいまこそ求められている

ジャーナリスト

鈴木哲夫



# 岸田首相と自民党に 「ガバナンス」



内閣の目指す多様性とはまったく合致しない

家の懇親会で、たとえば地元の伝統芸能や舞踊、演奏などが余興で

地方で開かれる政治歌山市のホテルで開かれたという。

さすがに岸田文雄首相も3月13日の参院予算委員会では、「内閣の目指す多様性とはまったく合致しない



## 「ガバナンス」と 「与党の矜持」はどこへ

昨年秋から尾を引いている政治資金パーティーをめぐるキックバックの裏金問題、そこへ最近では不適切パーティー問題。

取材をしながら共通して強く感じ

るのは、自民党の「ガバナンス」と「与党の矜持」の2つの欠如だ。

今年3月、一部のマスコミが入手し、報道されたその写真。

ひと時代昔の余興にしか見えな  
い。肌を露出した女性ダンサーがス  
テージで腰を動かし、客席にもダン  
サーは数人、そこでは参加者の男性  
とチップを口移し……。昭和、いやい  
やそれよりずっと昔？

じつはこれ、れっき

としたつい最近、昨年11月の会合。しかも主催者は何と自民党なのである。

和歌山市で開かれた

自民党青年局の近畿ブロック会議後の懇親会で、自民党和歌山県連

が企画し、国会議員や近畿ブロックの地方議

員ら50人が参加して和歌山市のホテルで開か

れたという。

地方で開かれる政治

家の懇親会で、たとえ

ば地元の伝統芸能や舞踊、演奏などが余興で

というのはよくあるケース。しかし、こんなショーとは。

報道直後から、不適切ではないかと自民党や和歌山県連などに世論からも批判が殺到。他のマスコミも徹底して取り上げてこれを問題視した。

この会合を企画した自民党県連の川畑哲哉自民党和歌山県議は、ダンサーを招いたことについてこう釈明した。

「多様性の重要性を問題提起しようと思ったので（彼女たちを）呼んだ」

「多様性」?!。

その言い訳には閉口した。そもそも裸同然の女性ダンサーのダンスを楽しむということを発想すること自体が、女性を見世物、下に見る男尊女卑の感覚であり、すでにそれぞれのものが多様性を尊重することにまったく反するではないか。

さすがに岸田文雄首相も3月13日の参院予算委員会では、「内閣の目指す多様性とはまったく合致しない



9年続いた「政高党低」…  
党の方はかろうじて二階俊博幹事長がいた

い」と身内を庇うことなく批判した。

さらに、問題なのは、その会合が青年局の会議のあとの懇談の場だったということであり、その場に招待され参加していた中に、自民党本部の青年局幹部の国会議員幹部がいたのだ。青年局の藤原崇局長（衆院岩手3区）と中曽根康隆局長代理（群馬1区）。

2人はいずれも参加していたことやショーを止めなかった責任がある

として役職を辞任したが、写真が報じられなかったらそのまま過ぎていったことになる。

もちろん、会合の趣向のレベルの低俗さや不見識は大問題である。しかし、「青年局」という部局が絡んでいたことが極めて深刻だと私は思うのだ。

青年局はじつは自民党の活力の1つ。特にいま裏金問題や政党支持率がどん底のときにこそ存在感が問わ

れる部局だ。

青年局は、全国の都道府県連の若手地方議員や青年組織で構成され、将来の党のあるべき姿も積極的に議論し、時には党幹部への提言などを行う。

参加資格は、衆院議員は当選3回以下、参院議員は当選2回以下とされる。

若手議員こそ、本来ならまだ永田町に染まっていない視点で、怯まず

執行部にどんどんモノを言えるはずだ。また、ぜひ言うべきである。それが自民党のためにもなる。

また、青年局長は将来の首相や閣僚の登竜門でもある。

過去、麻生太郎現副総裁、岸田現首相、額賀福志郎氏、渡海紀三朗氏、浜田靖一氏らが歴任してきた。

最近では、2011年から3年間の小泉進次郎局長時代に青年局は活躍した。東日本大震災に対して全国の若手議員のチームとして機能させ災害復興に当たったほか、拉致問題、経済対策、そして規制改革や党改革など党執行部や政府に先駆けても活動した。私も随分取材した。

いま、政治資金パーティの裏金問題で膿が次々に出てきている。だからこそ、いまこそ、提言などをしなければならぬときにこんな不始末が露呈し右往左往するとは…。

自民党の閣僚経験者のベテラン議員は最近の青年局という組織そのものについてこんな見方を示した。

「民主党から政権を取り戻してか





経世会以来の派閥のプライドもある

ら安倍晋三元首相、菅義偉官房長官、麻生太郎財務相など官邸主導の体制になった。俗にいう『政高党低』で、菅さんが首相を務めていたときまで

9年続いた。党の方はかろうじて二階俊博幹事長がいたが、それ以外の党の役職や部局は、何を提案したところで決めるのは圧倒的に強い官邸だから口を出さなくなった。ただ一方で選挙は連勝して自分の身は担保されているから何もやらなくても安泰ということ。結局その緩みがいろいろんなところに出てきていて、その1つが青年局の活気のなさとなっ出てきている。また、9年間、安倍さんたちも若手をどこまで必死で育ててきたかという側面もあるだろう。青年局なんて本当はいまこそ党改革でガンガン執行部を突き上げる時期。党執行部が青年局を常にそんな位置づけにして活性化をはからなければならぬのにそうしたガバナンスができていない」

### 裏金問題対応で

#### 官邸と党の連携は？

ガバナンスとえば、裏金問題へ

の対応についても、官邸と党が結束して当たってきたかという点、その連携はたびたび混乱してきた。

自民党は裏金問題に関わった旧安倍派議員を中心に処分を決めた。

ただ、この問題が発覚してから約4カ月。その間に、党独自のアンケート調査や衆参での政治倫理審査会出席などを行ってきたが中身は薄く、遅い。

「アンケート調査などはたった2問。政倫審も出席したのは一部議員で裏金については、知らぬ存ぜぬで肝心なことは言わない。それでも自民党は、この政倫審を引き延ばして存在を大きく見せてやってる感を出してきた。本当に必要なのは誰がどうやってこの仕組みを作り裏金を何に使ったのか。それを明らかにせず処分でこの問題をやり過ごそうとしている。世論は見抜いている。だから何をやっても内閣支持率は上がらない。政権交代すべきという数字が自民党政権継続を抜いた調査も出てきている」(立憲民主党幹部)





安倍派の森(喜朗)元首相に聞き取りをすべきではないか

会で進め、その案が初めて公開されたのが7日に

開かれた刷新本部会合。

しかも、会合はたった2時間。そして中身の最終

決定は岸田首相など執行部に一任とした。ところが、これに対して多くの

議員から「議論が不十分」と反発の声が次々に

上がった。

そこで、岸田首相は14日に急きょ刷新本部会議

を開いて広く議員から意見聴取するというドタバ

タぶり。

その会議の場では「17日の党大会までに決めて幕引きしたいのかもしれないが手順が違う」、「安倍派の処分はどうするのか」、「安倍派の森(喜朗)元首相に聞き取りをすべきではないか」などの意見が上がった。ただ、岸田首相から「明確な答えはなかった」(出席していた5回生議員)という。

こうした背景には、いまこそ最も重要な官邸と党執行部との連携が機能していないと自民党ベテラン議員

は本音を明かした。

「これほどの大問題でいちばん重要なのは首相と党を預かる幹事長の関係。本来なら裏金問題の調査にしても党則にしても幹事長が陣頭指揮をとり根回しもする役目ではないか」

茂木敏充幹事長は岸田政権発足以降、麻生派、茂木派で岸田首相を支えてきた。しかし、「茂木氏はポスト岸田への意欲もあり時々政策などでの積極発言もすることから、岸田首相は周辺に不快感を示していた」(前出ベテラン議員)という。

その2人の距離が決定的になったのは「今回の裏金事件の対応」(同ベテラン)だったという。派閥解散を岸田首相が茂木幹事長にろくに相談もなく決めたことが大きかったというのだ。

「茂木さんは、自分の派閥について、方向性の違う面々も何とか抑えながら茂木派を維持してきた苦労もある。経世会以来の派閥のプライドもある。茂木さんにしてみればふざけるなど

いうことになる」(茂木派幹部)。

ただ岸田首相は、その茂木幹事長と関係修復をはかるよりも、「裏金問題の党側の収集役として森山裕総務会長に委ねた」(同ベテラン)という。

森山氏は、安倍政権下で国対委員長を歴代最長の4年間務めたがこれを推挙したのは当時の菅官房長官。森山氏の調整能力を高く評価し、安倍首相に推薦したという。

「ガバナンス」と「与党の矜持」の2つの欠如



「ガバナンス」と「与党の矜持」の2つの欠如





反主流派の菅氏ともうまく関係が作れるのではないかと

「岸田首相にしてみれば森山氏は全方位で調整してくれる。しかも森山氏を重用すれば反主流派の菅氏ともうまく関係が作れるのではないかと、という計算もあったのだろう。そんなこともあって去年あたりから森山氏に相談することが多くなった」（旧岸田派ベテラン）

森山氏は今回の裏金問題でも、議員からの聞き取り調査の座長をきっかけに、全議員からのアンケートに関する采配、さらには「政治倫理審

査会（政倫審）をどう開くか、何人出席させるか、手順やその幕引きまで陰で国対委員長らと話しながら役割を果たしてきた」（同）という。

下村博文元文科相が、遅れて自ら政倫審に出席する意向を示した際、森山氏は「もう衆院では（政倫審は）やらない」と周辺に話したが、これを見ても一連の政倫審の流れに関わっていることが分かる。

ただ、茂木幹事長にしてみれば面白いはずはないだろう。岸田首相と

の溝が開くのは当然だ。

「岸田首相の森山氏への依存はいまに始まったことではない。昨年秋季に解散を模索した際に、岸田首相は、森山氏と自民党の事務方の3人で会った。そこで、情勢調査を分析し一連の裏金問題が表面化することなどが話し合われた。結局解散しなかったが、そんな重要な話を森山氏にもしていることを茂木幹事長が不快に思うのは当然。岸田首相の決断の重要な場面に森山氏がいるということだ」（前出旧岸田派ベテラン）

岸田首相に距離を置く自民党ベテラン議員が言う。

「岸田首相は、処分のあと、日米首脳会談、外務省の尻を叩いている日朝首脳会談、GWの外遊、賃上げの成果や減税で支持率挽回をはかるつもりだろう。もし、総裁選再選を狙うならそれらをバックに野党が出す内閣不信任案に対抗して会期末解散で勝利するしかない。そこを過ぎると、総裁任期までカウントダウンで解散は封じられる。しかし、党との一体が欠けている中で、さあ解散という一致結束ができるのか」

菅前首相も、3月末に、久々に沈

黙を破ってテレビ番組でこう発言した。

「自民党が国民の不信を取り除くために行動していくか極めて大事、最優先だ。そんな生易しいものではない」

処分を出したところで、これまでの迷走ぶりへの視線は「生易しいものではない」だろう。

政倫審が機能しないならその上の参事人招致や証人喚問などに進めて行くのが国民が納得する本筋ではないか。

岸田首相がやるべきは国会という国民監視の中で証人喚問など、そして、自民党の内輪の党則などではなく、企業献金問題や政策活動費などをどうするか、政治資金規正法改正、透明性の確保など、事件を起こした与党の責任として野党も巻き込んで改革をリードすることではないのか。

岸田首相と自民党に「ガバナンス」と「矜持」がいまこそ求められている。（了）

